

イエスはファリサイ派の人々と律法学者たちと食事に関する規定をめぐる論争をしました。この論争をめぐる律法の字面に書かれていることを問題にする彼らに対して、イエスは、「すべて口に入るものは、人を汚すことはない、口から出てくるものは、心から出てくるので、人を汚すのである。悪意、殺意、姦淫……」という言葉をもって、議論に終止符を打ちました。つまり、人間の内面から、まず自分自らを、そして相手を汚す、貶めるものが出てくるということです。

その議論に疲れたのか、イエスは、ユダヤ人があまりいないティレ・シドン地方に退かれました。ティレもシドンは、現在のレバノン、当時はローマ帝国の属州シリア州にある地中海沿岸の街です。そのティレやシドンという街は紀元前から鉄や銅器を使うフェニキア人が住んでいた古い街です。シルクロードのエジプトにつながるルートにあるティレなどは交易の街としても栄えましたが、紀元前6世紀にバビロニア帝国に侵略され、紀元前4世紀にはマケドニアのアレクサンダー大王にも侵略されたりしているのです。この時代に住んでいた人たちはいろんな民族が住んでいました、そしてその中に先住民族であるカナン人もいたのです。

21 イエスはそこをたち、ティルスとシドンの地方に行かれた。22 すると、この地に生まれたカナンの女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」と叫んだ。

イエスが来られるという噂を聞きつけたのか、カナンの女が「主よ、ダビデの子よ」と叫びながら救いを乞い求めてきました。娘が悪例に酷く苦しめられていると訴えるのです。

これは少し不自然なよひかけです。なぜならユダヤ教の言葉だからです。カナンの女には、きつとカナンの神があり、ローマ帝国の属州内にある神殿でまつられているいろんな神々とともに、ある。いずれにせよ女が、「主よ、ダビデの子よ」とユダヤ教のメシアとしてイエスに救いを求めるのは、もはやカナンの神ではないのです。

ユダヤの伝統にしたがって救い主、メシアだと呼ばれるイエスに敬意を払って（？）、救いを叫び求めているのです。それは、信仰ではなく、ただ娘を救いたい一心からそうしているのです。

このカナンの女が娘を救いたい一心でイエスに救いを求めたことは確かですが、彼女は、おそらく自らの信仰についてはまったく考えていなかったでしょう。カナン人の神とは、旧約聖書士師記やヨシュア記におそましい存在としてしきりに出てくるあのバアルを主神とする神々（その数二百三十四）なのです。

23 しかし、イエスは何もお答えにならなかった。そこで、弟子たちが近寄って来て願った。「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので。」24 イエスは、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところをしか遣わされていない」とお答えになった。

しかしイエスは黙ったまま何も答えません。弟子たちが「この女を追い払ってください。叫びながらついて来ますので」と言い寄ってきました。

このときイエスはわたしたちの期待を見事に裏切ります。ごごもの祝福の時のように、イエスが憤り、弟子たちに「女をわたしのところに来させなさい。妨げてはならない」マタイ10・14とは言っていないではありません。

むしろどうしてイエスとは思えない冷徹な態度をとるのです。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところをしか遣わされていない」と。この言葉によりイエスは、カナンの女に対して、今一度自分自身の信仰について深く省みるようにつながったのでしよう。

25 しかし、女は来て、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と言った。26 イエスが、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけません」とお答えになると、

しかし女は、その真意を十分に受け止めて、自省することなどせずに、イエスの前にひれ伏し、「主よ、どうかお助けください」と願うのです。そこまで懇願する女にイエスは、「そこまで願うのか、よしよかった」とは答えるではありません。

さらに酷く屈辱的な言葉を投げ捨てるのです。「ごもたちのパンをとって小犬にやってはいけません」。……なんと酷い言葉を放つことでしょうか。イエスの真意は他にある

のでしょうか。

27 女は言った。「主よ、ごもっともです。しかし、

小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」28 そこで、イエスはお答えになった。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされた。

屈辱的なまでにひどい言葉を受けた女は「主よ、ごもっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」と答えます。蔑みの言葉に怒るのでもありません。

彼女の言葉はユダヤ教の会堂や神殿にあるパンを意味するのです。神が人間に臨む聖なる空間、幕屋（神殿）にはパンを供える机が置かれています。その机の下に犬と呼ばれる異邦人がやってきてパン屑をいただくというのです。

しかし、机に備えられたパンは、通常、身を淨めた者、祭司でなければ、ユダヤ人も食べることはゆるされません。なぜなら汚れているからです。ところがこのカナン人の女は、そのパンを食べるのだと言います。

つまりわたしは異邦人、カナン人の女です。あなた方ユダヤ人が汚れていると違って相手にしない異邦人、それも聖書に記されているバアルの神を信するカナン人、あなた方が忌み嫌うカナン人の女です。そのわたしが聖なる者として分けられた祭司しか食べることができないパンを、いただくのです。

「わたしは人々から貶められているけれども、決して汚れてなどいない」と低いところから揺るがぬ確信をもって言うのです。

イエスが冷淡にあしらい、さらに侮辱的な言葉をもって追い詰めた結果カナン人の女があきらかにすることができた問題の核心は、「周囲にいるひとたちがあなたをどのように理解するのか、そんな周囲の評価ではない、大切なことは、のわたし自身が神の恵みに与ることが、できる存在である」という確信なのです。

はたしてわたしたちは十分に自己肯定できているでしょうか？神がわたしの存在を肯定しているのかもかわらず、周囲（社会、学校、時には身近な人たち）の評価を基準にして、わたし自らが自分を貶め否定してはいないでしょうか？…カナン人の女は、もはや逃げ場がない試練に追い詰められて、ようやく十分な思慮深い言葉をもって自らを肯定することができました。

イエスが聞きたかったのはこの言葉だったのです。彼はようやく心が安らぎ「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように。」そのとき、娘の病気はいやされました。